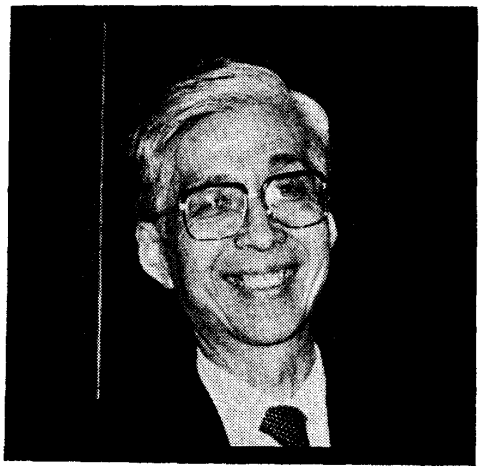
Japan Society for Simulation Technology



前会長

藤田広一先生を悼む

黒 川 一 夫

この度，本学会の発展に多大な功績のあった藤田広一先生の訃報に接し，慨歎の念を禁じ得ない．ここに衷心より哀悼の意を表する．最近，ようやくその活動が軌道に乗りつつあった本学会としては，優れた指導者でありよき相談者であった先生を失ない真に断腸の思いである．今後は会員諸氏とともに，わが国のみならず世界のシミュレーション技術の発展に学会活動を通して貢献して行くことが，先生に対する最良のはなむけであると思う．

藤田先生は非常に広い学問分野で御活躍になり，いまも私の側には先生から戴いたアナログ電子計算機，電磁気学ノート，基礎情報理論，教育情報工学概論，非線形問題等の著書があり，慶応義塾大学工学部の教授として広く電気，電子工学さらには教育工学の発展に大きな業績を残された．特に本学会に関してはアナログ技術の研究者等が研究発表や意見交換の正式な場をもち，国際学会（AICA，現 IMACS）に対して日本を代表する機関として組織されたアナログ技術研究会の第三代会長として昭和47年6月に就任された．その頃より，アナログ技術よりはハイブリッド技術やシミュレーション技術の研究開発が活発化し，次第に研究会の名称が内容にそぐわなくなってきた．そこで先生は各運営委員の意見をまとめ，内外の状況をつぶさに検討され，シミュレーション技術研究会と改称，更に会則の改正に尽力され学会の基礎を固められた．これはひとえに先生の御努力の賜物であった．

昭和52年6月には大学の工学部長に就任されるについて会長を辞され，学部長としての激務のため研究会への御出席も少なくなったが，その後も運営方針などに関しては適切な助言を与えられてきた．研究会を学会に改組した折には，その粗案がととのった時点で先生の御意見を伺いに工学部長室に参上したが，端然として聞いておられた先生が“皆さんが種々検討された結果で結構だと思いますよ．進めてみられたらどうですか”といわれた温容がいまも忘れられぬ一コマとなってしまった．

先生と私とは殆んど同じ年齢であるが，元来私の方が虚弱で，会合等でお会いするといつも健康について先生が注意して下さった．夜は早く寝て朝早く起きた方がよい，フトン位は自分であげた方が体によいなどと私の体を心配して下さった先生が急逝されるとは思いがけないことであった．3月31日に妙蓮寺において先生の葬儀が営まれ，故人の徳を偲んで多数の弔問客が参列したが，その列の中にあって学会を通しての先生とのふれあいが思い出され感無量であった．

学会の運営はこのところ比較的順調で，諸事業活動もようやく軌道に乗りつつあるが，ここに至るまでの先輩諸氏，特に藤田先生の御努力を忘れることはできない．ここにその業績を回顧し，改めて功績をたたえる次第である．

NII-Electronic Library Service